齋藤秋圃研究（二）
翻刻『京遊日記』（稿）

橋冨　博喜

はじめに

先号『年報　太宰府学』（第六号）において、江戸時代後期、ここ太宰府を中心に活動した齋藤秋圃の家系にのこる「齋藤家資料」について概要を紹介した。この齋藤家資料のなかに、画稿類（絵画資料）とともに、いくつかの興味深い文字の資料があることにもふれた。その文字資料のなかから今回齋藤秋圃の日記を紹介したい。

本日記は、天保五年（一八三四）、齋藤秋圃六十三歳のとき、※後妻とみと三男瑞五郎（のちの梅圃）を伴って京都に展墓の旅に出かけたときの記録である。先号でもふれたように許斐友次郎氏はこの日記について、「京都の宗家訪問と展墓を兼ねて、妻及び子の梅圃を伴ひ京都に遊び、父子合作の『京遊日記』十四巻を作つて居る」と記された。その後この十四巻の日記は戦災により焼失したと伝えられ、その全容については知ることがなかった。

今回紹介する『京遊日記』（〇一七一五、以下番号は齋藤家資料の調査番号、五桁で記している）は、この焼失した日記の原本と考えられ、天保五年三月十五日から五月一日京都上賀茂神社祠官岡本家を訪ねたこと、そして（五月）二日の日付を記したところで終わっている。許斐氏が記すところによればこのあと秋圃ら三人は、京都名所見物や伊勢神宮参拝にでかけ、さらに名古屋の豪潮律師との再会をはたし、同年八月十六日太宰府に帰着したという。江戸時代後期の画家（絵師）の日記としては、秋圃の少し前十八世紀末の司馬江漢による『西遊日記』がよく知られている。しかし近世において、筑前、あるいは太宰府に関わる絵師の日記としては初出のものであり、この時期の絵師のありようを垣間見るのにふさわしい資料、そしてなにより、わずかひと月あまりの記録とはいえ、齋藤秋圃の足跡をたどるうえで欠くことのできない資料といえよう。資料中読みづらい箇所も多く、すべてを読み解いたとはいえない状態であるが、ここにその日記（稿）を提示して大方のご教示をお願いする次第である。それでは以下稿をあらためその日記の翻刻を提示していきたい。

※齋藤秋圃の生年に関しては、先号においてこれまでいわれてきた生年（明和五年・一七六八）より、四年ずれる可能性があることを指摘した。齋藤家にのこる天保三年（一八三二）の還暦の資料、およびこの春（平成二十四年）に調査した古稀を祝う印章の銘文（天保十二年・一八四一）などから、明和九年（安永元年・一七七二）の生まれと考えられる。ここではこの明和九年を生年として年齢を数えている。

一　翻刻『京遊日記』（稿）

【凡例】

一、本稿は齋藤家資料中の『京遊日記』の翻刻である（図1から15）。
二、大きさは縦十二×横十七cm、紙数十枚、右側を簡易にとじている。
三、翻刻にあたって可能なかぎり原文に忠実に読み取った。ただしその読みが不明のところは「■■」で補っている。
　また原文には句読点がないので、「、」（読点）を付け加えた。
四、変体仮名は通常の平仮名に改めた。繰り返し記号「々」「ゝ」「〳〵」、合字「ゟ」（より）は用いた。
五、固有名詞、地名等はそのまま記し、現在の地名などを脚注に記載した。

（表紙）※文字なし

三月十五日ゟ筑後乙吉村[1]ニ行、廿一日ニ
秋月[2]へ帰り、廿四日ミ、田[3]へ行、
同日宰府[4]ニ付、卅日御供屋[5]見立
天保五年四月一日、早朝天満宮(執)[6]参慶、
おとミ[7]、瑞五郎[8]供すま仰つれ勢行坊立寄、
御供屋ニて見立本膳出ル

（表紙裏）

【脚注】

なお注記については、次の辞典類から抜粋し整理した。
一、『角川　日本地名大辞典』（40福岡県、35山口県、34広島県、33岡山県、27大阪府、26京都府上巻）の〈近世〉の項目
二、『日本歴史地名大系　第四十一巻福岡県の地名』平成十六年、平凡社
三、佐和隆研、奈良本辰也、吉田光邦ほか編『京都大事典』昭和五十九年、淡交社
四、『平成八年版　日本分県地図地名総覧』人文社
五、『太陽コレクション・地図　江戸・明治・現代』のうち「京都・大阪・山陽道」（昭和五十二年五月）、同「西海道・南海道」（昭和五十二年八月）。なお京都・大阪・福岡については同書付録の「改正京町御絵図細見大成」（天保二年）、「改正増補　国宝大阪全図」（文久三年）、「福岡城下と博多近隣図」（文化九年）なども参照した。

1　乙吉村。旧筑後国三井（御井）郡に属す。元三井郡北野町乙吉、現在の久留米市北野町。
2　秋月。秋月黒田藩の領地。齋藤秋圃は文化二年（一八〇五）七月、藩主黒田長舒によって召し出されている。
3　ミ、田。ミ、田の地名は見あたらない。ただ旧筑前国夜須郡や筑後国生葉郡（現うきは市吉井町新治）に三牟田の地名がのこる。
4　宰府。宰府村。現在の太宰府市。太宰府天満宮の門前町として中世から栄えた。
5　御供屋。太宰府天満宮五別当のひとつ。延寿王院、小鳥居、執行坊、浦之坊、御供屋がある。
6　天満宮。太宰府天満宮。菅原道真を祀る。
7　おトミ。齋藤秋圃の後妻。太宰府神社祠官別当菅原信覚の姉。御供屋広辻家の女という。弘化三年（一八四六）歿。
8　瑞五郎。秋圃の三男、後の齋藤梅圃。梅圃の生年は光明寺法名塔によれば文化十二年（一八一五）、嘉麻市馬見神社絵馬落款からは文化十三年と考えられる。とすれば天保五年（一八三四）には十七、八歳である。

○晴
同二日早朝出立、観世音寺[9]迄見送り人々、
信覚殿[10]、宮松丸、おちせとの、おちか、其外ニ傳之丞、
竹次郎、覚寧、喜市、釜屋中村かの、嶋や
儀右衛門、新作妻右京、寺主坊子息、後ゟあめや、
亀や、長崎や、大工九平、桶や　　来ル、
見立酒出ル、いつれニいとまをつげて関屋[11]ニ致ル、
それゟ休足の時秋月ゟ八百作ニ逢て、しばし
咄アリ、同人先ニ行、四ツ時也、ざつしよのくまにて[12]
　　魚や武平ニ逢、甘木[13]ニ行候、
中飯、麦野[14]ニて壽泉ニ逢、ひゑ[15]ニて休、
はかた揚町八百やニ付、夕方ゟ福岡ニ行、大工町[16]、
すのこ町[17]いゝつかや久平[18]ニ参り、雨ふり出す
○朝雨天
三日早朝、湊町野竹ニ行、帰り奈嶋(名)町奈良や、
長さきや、萬町[19]魚(カ)や与平、久我や、西浦(カ)や、
中のばん松壽[20]、八ツ時帰り聖福寺[21]行、秋月
中野順平、志王寺[22]庄や茂八ニ逢
○
一、四日雨天、五ツ半時聖福寺ニ行候、瑞五郎同道、
道中にてたわや源市ニ逢、同人同道ニて
帰りニ東圃方[23]ニ行、五兵衛面會、八ツ時八百や
ニ帰り、酒出る
雨天
一、五日、瑞五郎仰つれ聖福寺行、

（1丁目表）

9　観世音寺。清水山観世音寺（現在天台宗）。七世紀前半に建立された九州屈指の古刹。戒壇院を擁し、天下三戒壇のひとつでもあった。太宰府市観世音寺五丁目にある。
10　信覚殿。秋圃の後妻とみの弟、菅原信覚。脚注7参照。
11　関屋。現在の太宰府市関屋。日田街道とさいふ詣りの道が分かれるところ。
12　ざつしよのくま。雑餉隈。旧筑前国御笠郡山田村内。現在の福岡市博多区南部と大野城市北部にまたがる地名。
13　甘木。現在の福岡県朝倉市。
14　麦野。旧筑前国那珂郡西堅糟触に属す。現福岡市博多区。
15　ひゑ。比恵。旧筑前国那珂郡堅糟村の大字。現福岡市博多区。
16　大工町。江戸期福岡城下町人町六町筋の町名。六町とは東名島町、西名島町、呉服町、本町、大工町、簀子町で、福岡城の北に位置す。現在の福岡市中央区大手町あたり。
17　すのこ町。簀子町。脚注16参照。
18　いゝつかや久平。飯塚屋久平。博多の絵馬屋。少し時代が下がり、同一人物かどうか確証はないが、嘉永五年（一八五二）に建立された太宰府天満宮銅製麒麟並うその寄進者名のひとつにその名が見える。
19　萬町。江戸期福岡城下の北東部に位置す。現在の福岡市中央区天神から舞鶴にかけての地名。
20　中のばん松壽。許斐氏の新聞記事（昭和八年）に出てくる秋圃交友者のひとり、医師の荒木昌壽（松壽）か。
21　聖福寺。福岡市博多区御供所町にある臨済宗の古刹。建久六年（一一九五）栄西禅師の建立になると伝える。この当時の住職は仙厓和尚である。
22　志王寺。四王寺村か。四王寺村は旧筑前国糟屋郡。福岡藩領。
23　東圃。村田東圃（享和二年―元治二年）。江戸時代後期の筑前の絵師。なお江戸時代末の作品であるが、秋圃、東圃、それに尾形洞霄三人の合作になる《雁図》ものこる。

七ツ時信覚殿来ル、秋月たより書状持参
晴天
一、六日、八百や出立、両掛持箱崎[24]之者へ持ス、
笹栗[25]ニて中飯、人足飯塚迄[26]七匁五分也、
七ツ半時飯塚樽や孫七ニ付、近水舎ニ泊ル、
夜、邊平、甚吾来ル
○
一、七日、朝飯事大きニ延引、鷹取宗的老、
中の茶屋、油や邊平行、帰ル
○一、八日、前夜ヨリ風雨、甚吾、邊平、才助、
大工兵太夫来ル、
見舞ニ餅、鷹取氏、油や邊平、甚吾、、樽やふすま弐枚
書、山水、表にハとり
雨天
○一、九日、夕飯後古賀や、山鹿やニ行、
キヌ地寿老人画書
○十日、邊平、甚吾、宗的、弥左衛門見立来ル
○十一日、今朝出立之處、孫七来て、今日之所
延引之事申候ゆへ見合
○十二日、早朝河露深く、五ツ時画仕舞出立、
甚吾、邊平来ル、弥衛門、孫七画之儀ニて
両人申分仕来、よふ〳〵取なやミ、宮之前
迄見送り、小竹[27]茶店休足、新作小倉[28]
行、米や弥吉方へ行、岩はな[29]茶ミセ
中飯、古屋の瀬[30]京や喜八方宿

（1丁目裏）

24 箱崎。現在の福岡市東区箱崎。筥崎宮がある。
25 篠栗。旧筑前国糟屋郡のうち。福岡から飯塚に向かう街道の交通の拠点で、八木山峠を経て飯塚につながる。
26 飯塚。旧筑前国穂波郡のうち。福岡藩領、飯塚の宿。江戸時代長崎街道の宿駅（筑前六宿黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田）のひとつ。
27 小竹。福岡県鞍手郡小竹町。飯塚から木屋瀬に向かう長崎街道筋にある。
28 小倉。江戸時代旧豊前国企救郡のうち。小倉城の城下町。現在の北九州市の中心。
29 岩はな。不明。
30 古屋の瀬。木屋瀬。旧筑前国鞍手郡のうち。福岡藩領。長崎街道の宿駅（筑前六宿）のひとつ。現在北九州市八幡西区木屋瀬。

晴天　人足ノ者申分在り、
○十三日出立、永源寺米や猪助方
立より石坂休足、四ツ時黒サキ[31]桜やニ
付、但シ宿入口ニて新作逢、宰府江傳言、
中飯仕舞、瑞五郎仰つれ蔵元
吉村集人方ニ行、喜六太夫秋月参
留守中なり、又桜や帰り
画三枚書、主人のたのミもの在、帰路ニ
のこす舟人　来ル、舟ちん銀七十匁
飯料一日百二銅定、荷物相渡シ、
明日小倉ニ三人共行
○十四日、黒崎出立、今朝少雨天、北風
在、肥前大主[32]今日大里御渡海ニて黒さき
御泊り之由、御家中段々ニ入込、四ツ時小
倉ニ米や弥吉殿ニ着、家内面會して四丈
半小座敷床桟物一味袋（カ）（図あり）、せんし
茶二界座敷中段二間在り、一間勝手
琴なとあり、上段二間十弐帖、二十四帖一間
半床袋棚桜画霞棚カ掛二幅対仙厓、
次ノ間ニ哺月ノカク（額）カケ、上ノ間満耳松風
向ヒカコイアリ、角ニクサリ、角釜、ガク扇
面金地古画雪フカ（カ）シ、次四丈半水屋、又
次三丈臺め、
中飯汁ミそ、のり、向平鯛切身、さんしょ葉、酒
肴いり付、

（2丁目表）

（2丁目裏）

31　黒サキ。黒崎。旧筑前国遠賀郡のうち。小倉藩領。現在北九州市八幡西区黒崎。江戸時代長崎街道の宿駅。

32　肥前太守。この時期の佐賀藩の藩主は鍋島直正（閑叟）公（『藩史大事典　第七巻　九州編』昭和六十三年、雄山閣）。

午ノ時肥州大主御通、ウツホ（空穂）目立モリ
ナリ（図あり）、後休足ス、夕方弥吉殿
弟治助来ル、面會、雲蛙（ウンカ）といふ、夜飯、
とうふ、あさ草のり、五ツ半時休足、明ゑ雨
ふり出
〇十五日、今朝雨はれたり、飯後大橋
さらや七衛門方ニ行、吉村弥内黒崎ゑ来ル、
いせや彦平忰、酒出ル、吸物、生ミそ、ふり、
たこさんししよミそ、小倉筆（衍）さしこと、小松山
留吉来ル、口筆書あり、小松山手ぬくひ
おくる、九ツ時米やニ帰り、一眠して足
立山廣壽山[33]ニ行、おとミ、瑞五郎、喜平、
弥吉、せんし茶道具持参、一ノ門ニ第一関と
いふ額（額）アリ、二ノ門ニ不二門といふかくあり、本堂
法丈其外輪堂御たまや、又足立ノ峯ニ
北震ノ宮、房の数十八房、ま事ニ霊地なり、
法丈ニいたり開山不非尚ノ像持渡り給ふ、
木根ノ香かふ臺木像笠杖（衍）ちよふ、
其外庭のかゝり石なと台むして
おもしろし、
それゑ北谷ノ　（四行の間に図あり）
方房ニ三ケ處ニ
いけり、筑前海を
見る、日も山のはニかゝり月もすてニいたり（てカ）、
（図あり）いとましてかへりぬ、此時道ニ蛍の

（3丁目表）

33　廣壽山。広寿山福聚寺。北九州市小倉北区にある黄檗宗の寺院。寛文五年（一六六五）建立と伝える。開山は即非如一。

はしめて飛光す、しく、中の性来（往）
筑前八丁こへ[34]のわかれ道なと見き、て、夜
六ツすきニ米やニ帰り風呂ニ入、飯事して
休足ス
晴天
○十六日、朝瑞五郎角力見物行、朝飯後ゟ
画はしめ
○十七日、大里[35]常見屋善作殿
ニて休足致、舟ニのる、九ツ時小舟ニて関渡る、
乗組永野氏後室手代太左衛門、小女三人
なり、大坂小倉屋輔（鋪）前豊後や茂八方への
傳言たのミあり、八ツ時関ニ付、黒崎舟
乗、
乗間十二人、柳河　四人、
飯塚男女二人、姫路室人二人、瑞五郎、おとミ
四人ニてあミた寺[36]参慶、夜半少雨ふり
晴天
○十八日、六ツ半時出舟、田浦[37]ヨリ順風ニて夜四ツ
時上ノ関[38]ニ入ル、今日下関ヨリ三十六リ（里）なき、めてたく
渡海相済、月清シ
晴天
○十九日、出舟風無シ、八ツ時沖哥室[39]ノ邊ニてしを
まちし處、風あしく沖のかむろ（浄瑠璃）ニ入、夜雨ふり
出して、舟頭イ蔵しよるりを（鱗カ）舟ニかワる（た）

（3丁目裏）

34　八丁こへ。八丁越。朝倉市と嘉麻市とをむすぶ山道、八丁峠ともいう。慶長十一年（一六〇六）に長崎街道ができるまで、筑豊と秋月、さらに筑後とを結ぶ主要な交通路であった。

35　大里。旧豊前国企救郡大里村。小倉藩領。内裏（大裏）ともいう。現北九州市門司区。

36　あミた寺。阿弥陀寺。山口県防府市牟礼にある華厳宗の古刹。鎌倉時代東大寺を再建した俊乗房重源の建立になる（『県別シリーズ　郷土資料事典　山口県・観光と旅』昭和六十一年、人文社）。

37　田浦。不明。

38　上ノ関。上関。現山口県熊毛郡上関町。熊毛半島の南端、および瀬戸内海西部に位置する長島、八島、祝島にあたる。近世瀬戸内海航路の主要な港。なお岡山大学附属図書館所蔵（池田家文庫）の《日本大絵図》留書に「上ノ関より下ノ関へ三十五里」とあり、秋圃が「下関ヨリ三十六リ（里）」と記すところとほぼ一致する。

39　沖哥室（沖のかむろ）。沖家室。現山口県大島郡周防大島町、沖家室島。瀬戸内海航路における主要な港のひとつ。

雨天　北東風
○廿日、かむろニかかり、間や、米や伊衛門、上リ老母
あり、画をのそむ、朝飯後上ノ関小田村忠衛門といふ人
四五人、間や来、せんし茶入てはなす、座頭壱人、小児
弐人、其外三四人もあり、地蔵尊[40]ニ参慶、又七ツ
時柳河人も来ル、せん茶（浄瑠璃）入ル、肥前之田原何かし
来ル、夜ニ入てしよるりと画とかへる、伊蔵もかたり
けり、四ツノ比休
○廿一日、今朝また画たのミあり、瀧鳴舎主人
ほつ句、ことし霜（カ）月末つかた　築紫
なる宜冠上京の折、かかる風波順
ならす、此家室に船寄られしに
祠て面謁し一（ひと）トかたならぬ、
画院の因ニて候や、海上咏渡り、■等
や給ふり見て勇ミ〳〵出船急かれ
に供、綱にえ付壽斗しか李、
船曳も還発止し
時鳥　　菩薩和尚
なを二三枚之画、扇面を書てひま也、
出舟していとまをつけたり、みな〳〵
波渡場まて来て順風を送りぬ、
　　カラトニシヲ待て、[41]
風西になりて、夜六ツ時笹嶋[42]かゝる
○廿二日、なとりの嶋[43]のあたり〻雨になりて、
月代[44]〻舟を出して、いよ〳〵西の風ニなりしハ、

（4丁目表）

40　地蔵尊。不明。

41　カラト。不明。
42　笹嶋。笹島。山口県大島郡周防大島町小泊沖にある島。
43　なとりの嶋。不明。
44　月代。不明。

阿氏とのあたりニ風波つよく、よふ〳〵白石[45]
しを待をせす、八ツ時出舟月上りて室ニ入ル、
室直吉宅ニ上り茶ヲ出
晴天
○廿三日、室を出して風大西に相成、淡路、
須磨、明石も左になして、川口天保山[46]江
の遊人もめつらしく、あまたの遊舟美を
つくしてありき、河口ゟ常安橋[47]ニ入、
同八ツ時なり、御屋敷小林方付、すし酒なと
持居て七ツ時より嶋の内ゟ順慶町[48]西[49]ニ
行、新町[50]西口九軒町見せ付、東ほり上り
夜五ツ半ニ中の嶋[51]ニ帰りぬ
晴
○廿四日、朝六ツ半時江戸ゟ梶原氏春朝
くし橋　十人斗下り有、春朝ハ小林
方付、今日ゟ同宿ス、朝飯半後ゟ夷嶋(カ)筑[52]
前や三郎助方ニ行候、それゟ座麻稲荷[53]
御霊東西御堂[54]、どふとんほり[55]、高ず
　　御茶湯地蔵[57]、
生玉寺町[58]を上り、御城両町奉行、天満橋[59]
を渡り天満宮[60]参慶、見せ物山あらし、もなし
物奉拝繪馬見物、とらやまんちうや、
七ツ半時御屋敷ニ帰りぬ、六ツ時越中橋[61]南
つめ、　太助方大里長野野上や栄蔵
ニ逢

（4丁目裏）

45 白石。不明。ただ岡山県笠岡市に白石島があり、白石港はやはり瀬戸内海航路の主要な港であった。
46 天保山。別名目標山（めじるし）。大阪市港区築港三丁目にかつて存在した小丘。安治川河口の浚渫によって積みあげられ、天保三年（一八三二）十二月に完成したと伝えられる。
47 常安橋。なにわ筋の橋。土佐堀川（旧淀川）に架かり、大阪市北区中之島と西区土佐堀とを結ぶ。橋の名は淀屋常安（じょうあん）にちなむ。
48 嶋の内。島之内。現在大阪市中央区（もと南区）。北は長堀通、南は道頓堀川に接し、北接する船場とともに大坂の核を形成している。
49 順慶町。大阪市南区にあり大坂三郷南組のうちに属す。その名は筒井順慶の館舎が設けられたことによる。
50 新町。現在の大阪市西区にあり、大坂三郷北組、南組のうち。立売堀川と長堀川の間、西横堀川寄りに開かれた公設遊郭地。新京橋町、新堀町、瓢箪町、佐渡島町、吉原町の五曲輪（廓）があり、その余地に五曲輪年寄の支配をうけた揚屋町の九軒町、一町一屋敷の佐渡屋町があった。なお享和二年（一八〇二）、瀧澤馬琴がこの新町呉雀楼にて亦介（齋藤秋圃）と出会ったことはよく知られている。
51 中の嶋。中之島。大阪市北区の南部、旧淀川にある川中の島。船場、島之内とともに大阪の中心部をなす。
52 夷嶋。不明。
53 座麻稲荷。坐摩神社。現大阪市中央区（もと東区）久太郎町にある神社。旧官弊中社。神功皇后、あるいは応神朝に創祠と伝える。東本願寺難波別院の西。
54 御霊。御霊（ごりょう）神社。大阪市中央区（もと東区）淡路町にある神社。旧府社。近世大阪城代が就任すると、市内巡見諸社参拝のあと必ずこの神社に参拝する習わしであったという。
55 東西御堂。北御堂（西本願寺津村別院）と南御堂（東本願寺難波別院）のことか。これらの門前を南北に通じる三間幅の道路が御堂筋となった。
56 どふとんほり。道頓堀。大阪市中央区（もと南区）の道頓堀川南側一帯の歓楽地区。歌舞伎、義太夫、見世物などの小屋が栄え、水茶屋が軒を連ねる。大坂町人文化の核となっている。
57 御茶湯地蔵。不明。
58 生玉寺町。現大阪市天王寺区、四天王寺の北に位置する寺町。生國魂神社（いくくにたまじんじゃ）がある（難波大社ともいう）。
59 天満橋。江戸時代淀川（大川）に架かる橋のうち、大阪城に最も近い東端の橋。

雨天
○廿五日、朝天満宮参慶、梶原氏、舟頭伊蔵、
同百（道カ）、栄蔵、魚や三衛門来ル、川嶋弥助
来ル、六ツ時ゟつちや舟ニ乗込、雨少し
ふりて大坂をはなれ、森口[62]のわたりより
いよ〳〵あめふり出し、其上舟頭壱人
足をいため舟かゝりニ成
廿六日、朝六ツ時出舟して平方[63]にて飯事、
いよ〳〵雨もふりて、よふ〳〵七ツ時伏見[64]ニ付、
つちや舟宿池六ニ上り飯事をして、■大権
小衛門方一宿、油かけ町[65]つしまや弥兵衛
方行、弥兵衛在宅、うす茶、せんし茶出ル、
菓子江戸よふかん、くれの比旅宿帰りぬ
晴天
○廿七日、朝飯後大ツカヲ[66]立、油カケ町津
崎屋（嶋）ニ行、せんし茶、中飯平笹かキ、牛房、
鯨千代、久トウノ豆、七ツ時酒、巻すし、
巻玉子、サワラあんかけ、打板かまほこ、
入湯
晴
○廿十八日、猪に梅、白砂糖平せんまい、干リヨウス、
宇治行[67]、山上善太夫宅、菓葉雪、金平糖、
ウス茶、飯半、竹子、椎茸、玉子、向塩引サケ、
酒、打板、大根おろし、巻玉子、タキ木ナツトウ、
茶ヒツ金森、

（5丁目表）

60 天満宮。大阪天満宮のことかと思われる。現在大阪市北区天神橋二丁目にある。
61 越中橋。江戸時代、土佐堀と中之島とを結ぶ橋のうち、常安橋とその下流湊橋とのあいだに架かる橋。
62 森口。旧河内国茨田郡守口町。現大阪府守口市。淀川左岸に位置する。
63 平方。旧河内国茨田郡枚方村。現大阪府枚方市。
64 伏見。旧山城国紀伊郡伏見町。現京都市伏見区。
65 油かけ町。油掛町。京都市伏見区内にあり、江戸中期の町組のうち南組一〇五町に上、中、下の油掛町がみえる。
66 大ツカ。不明。
67 宇治。現京都府宇治市。

吸物、瀬藤花のり、菓子江戸ヨウカン、それゟ
三室くわんおん[68]参慶、宇治興聖寺[69]、朝日山
恵心院[70]、宇治橋渡、平■（登）院[71]、橋姫通図、
宇治ツ、ミ（堤）[72]、極嶋、豊後橋[73]、油カケ町津嶋や
付、夜飯麦めし、いも汁、しを魚、猪口ぬかこ
晴
○廿九日、伏見出立、朝飯、めし茶碗ニ茶、
平椎たけ、飛龍頭、竹子、藤森参慶[74]、いな
り[75]、東福寺通天橋[76]茶店[77]ニ休、門前中飯、竹
子こんふ、大佛[78]、三十三軒堂[79]、ミ、ツカ[80]、大佛餅、
五橋寺町ノ四条御タヒ所[81]ニて執行坊ニ逢、六角
竹屋町[82]（カ）釜座ニしんかうやニ付、酒、たい、玉子焼、
鯖すし、吸物うしをに、うち板、
夜飯、ほね切汁、なこやミそ、かいわりな、平ぢゆんさい、
鯛、香物、ならつけ、　羊（半）堂[83]参慶、夜見せ
○五月一日、朝竹子にしめ、今朝大内[84]拝見、
堺町御門[85]ゟ御所内仙洞様御前ゟ今出川
御門、宝町かしらゟ妙覚寺[86]、見對院菴[87]ニ
参慶、今宮御たひ所[88]ヨリ岡本[89]ニ参ル、
甲斐輔[90]面會、中飯、うなき汁、赤ミそ、はも、
酒肴加茂川ひかいもち、子つけ焼、鯛切身、
ふな子つけ、なます、かますこしを焼
きうり糸作其外三品あり、北野
天満宮[91]参慶、平の社[92]又下森ニいたり、
くわんつふ上長者町通ゟ城河下立賣、

（5丁目裏）

（6丁目表）

68 三室くわんおん。三室観音。明星山三室戸寺（京都府宇治市菟道滋賀谷）、および本尊千手観音のこと。

69 興聖寺。宇治市宇治山田にある曹洞宗の古刹。仏徳山と号す。平等院からはほぼ真東にある。

70 朝日山恵心院。宇治市宇治山田にある古刹。弘法大師によって開かれ、恵心僧都源信によって再興された。

71 平登院。平等院。宇治市宇治蓮華にある寺院。平安時代後期、藤原道長、頼通によって造営された。阿弥陀堂は鳳凰堂として、また本尊阿弥陀如来像は仏師定朝の作としてよく知られている。

72 宇治ツ、ミ。豊臣秀吉によって築かれた宇治川改修の堤防。

73 豊後橋。現京都市伏見区にある観月橋。

74 藤森。京都市伏見区深草鳥居崎町にある藤森神社か。

75 いなり。京都市伏見区深草藪之内町にある伏見稲荷大社か。

76 東福寺。京都市東山区本町にある臨済宗東福寺派大本山。

77 通天橋。東福寺境内洗玉澗（三ノ橋川）に架かる橋。

78 大佛。江戸時代京都には二体の大仏があった。一体は方広寺の大仏で、もう一体が東福寺仏殿の釈迦如来像である。前者は寛政十年（一七九八）に焼失し、天保十四年（一八四三）に半身の大仏として再興されている。天保五年の時点で見ることができるのは東福寺仏殿釈迦如来像である。なおこの大仏も明治十四年（一八八一）に焼失した。

79 三十三軒堂。三十三間堂。京都市東山区にある観音堂でただしくは蓮華王院本堂。平安時代後期の創建。堂内には千体千手観音像がまつられ、本尊は鎌倉時代湛慶の再興になる。

80 ミ、ツカ。耳塚。京都市東山区正面通本町東入にある塚。高さ約七メートルの墳丘で、五輪の石塔が建つ。別名鼻塚ともいい、秀吉の朝鮮出兵に関わる遺跡。京都国立博物館の西にある。

81 四条御タヒ所。御旅所。祇園社（現八坂神社）の祇園御霊会の際、三基の神輿を安置する場所。平安時代冷泉院東都洞院にお旅所が設けられ、近世になって今の四条に移されている。現在の四条河原町西、春長寺の北側あたり。

82 六角竹屋町。現在の二条城東のあたりか。

83 羊（半）堂。三十三間堂にある通し矢の種目のひとつ。半堂は堂の中間の距離を射てその射通しを競った。

大文字や前ゟ西之洞院[93]丸太町町より竹や
町ニ帰る、夜食あごしを焼、平ふうす、
くすわさひ、夜酒、きうり、竹子にしめ、
そば切、鯛切身焼、とふきびもち、鯛ニ
ふきにしめ、　瑞五郎、喜太郎、両人さいふ
の人々江状書持参、きおん[94]ニ参る
晴天
○二日、
（裏表紙）
わらくつ一足　いもじやくし

（6丁目裏）

84 大内。内裏。京都御所。
85 仙洞様。京都御所内にある仙洞御所。仙洞とは上皇の御所、あるいは上皇の尊称、院御所ともいう。
86 妙覚寺。京都市上京区上御霊前通小川東入下清蔵口町にある日蓮宗の寺院。
87 見對院菴。不明。
88 今宮御たひ所。京都市上京区若宮横町、府社今宮神社旅所。
89 岡本。上賀茂神社社家のひとつである岡本家のこと。齋藤秋圃といとこの関係にあるとおもわれる岡本保孝（一説に保孝）は文政元年（一八一八）四月（一説に文化十四年歿）に亡くなっているので、この天保五年に面会したのはその子息岡本胡保（天保七年歿）であったと考えられる。
90 甲斐輔。岡本保孝は甲斐治部大輔を称し、息胡保が甲斐守を称している。
91 北野天満宮。京都市上京区馬喰町にある菅原道真を祀る神社。
92 平の社。京都市北区平野宮本町にある平野神社。北野天満宮の西に位置する。
93 西之洞院。烏丸通と堀川通の中間にある南北路。江戸期にはこの通りに面して三条西洞院丁、坤西洞院丁、三方西洞院丁、姉西洞院丁などの地名があった。
94 きおん。祇園。京都市東山区、八坂神社西門前四条通を中心とした鴨川以東一帯の地をいうが、その称は一定していない。

二　『京遊日記』と関連資料について

以上、齋藤秋圃の『京遊日記』（稿）をみてきた。つぎに齋藤家資料にのこる、この日記と関わりがあろうかと考えられる資料をすこしみていきたい。

まず先の『年報　太宰府学』第六号にも紹介したが、《瀬戸内写景図》（〇一六四五）がのこる。写景図は紙数三十九枚で右開きの画帖としてみる。表紙に文字はなく、冊子中に年記を示す文字もみえない。本写景図の頁をめくるとすぐに低い山並みの海岸と何艘かの帆船を描く頁があり、そのつぎにこれもやはり低い山並みと海岸の様子、そして左の頁に大きな島を描いている。そこに「アカシ」、「淡路」の文字がみえる（図16）。明石を右に、淡路島を左に描いているので、この順序で考えれば大阪方面から瀬戸内海を振り返ったスケッチかとも思われる。以下色注や覚書を除いて本写景図の墨書を見ていけば、「油宇」「沖ノカムロ」（図17）「田ノ浦」「袖ノ島」「ビンゴ」「トモ」「ミサキ」「ハナグリセト」「ミタライ」「上ノセキ」などの地名がみえる。先に日記の翻刻でも記したように、これらの地名のいくつかは瀬戸内海航路の主要な港（室）でもある。現在のところ齋藤秋圃が筑前に下っての後、瀬戸内海を航行したと考えられるのは、文化三～四年（一八〇六～七）の秋月藩主黒田長舒候の参勤交代に従ってのことと、この天保五年の京都行きのことのみで、それ以外に瀬戸内海を渡った記録は見あたらない。写景図中の文字が、先の日記の文字と酷似するので、本《瀬戸内写景図》は、天保五年京都に向かう往路の、あるいは太宰府に戻る帰路の記録と考えてもいいだろう。先号では帰路の記録かとしたが、途中「油宇」「沖ノカムロ」「ビンゴ」「ミタライ」「上ノセキ」など、航路の順序が前後する箇所もあるので、いまのところ往路か帰路か明確には判断がつかない。

京都滞在中の記録として四月二十六日に伏見に到着し、五月一日の岡本家訪問までが記されているのは先に見てきたとおりである。許斐氏の記録によればこのあと秋圃一行は、伊勢神宮参拝、名古屋の豪潮律師訪問などをおえて帰途につき、八月十六日太宰府に帰着したという。この間の記録としては、これも先号に紹介したが、齋藤家資料中の《養老瀧図》（〇〇八九五）裏面墨書に「養老山図／天保年両親共参宮致／名古屋池上栄蔵殿参帰行／右之處参六月二ヶ瀧う／たれ」と記されていることがあげられる（図18）。この墨書はのちに梅圃によって記されたと推察できるが、天保五年の京都行きの際に名古屋からの帰途、岐阜県養老町にある養老の滝を訪れたことがうかがえる。名古屋行の目的のひとつは、ここに記されている池上栄蔵なる人物との面会であり、もうひとつは、文化四年（一八〇七）尾張公に招かれて長栄寺（名古屋市北区柳原）や岩窟寺（愛知県知多郡知多半島）の住職をつとめていた天台僧豪潮律師（寛延二年・一七四九―天保六年・一八三五）との再会を果たすことであった。

齋藤秋圃と豪潮との関係でいえば、齋藤家資料中に《天台大師像》（〇〇一四九、図19）がのこる。本作品の墨書に寛政九年（一七九七）に太宰府の信賢らのもとめに応じて豪潮が描いたことが記されている。画稿はこの豪潮が描いた天台大師像をのちに秋圃が写したものと考えられる。太宰府においての知り合いであったと思われるが、秋圃が秋月で召し出されたのが文化二年、豪潮の名古屋行きが同四年ということを考えれば、筑紫の地においてそれほどおおくの接触があったとは考えにくい。ただ天保五年、秋圃と豪潮が会ったことは、先号で

も記した別件の秋圃筆富士図に豪潮が賛を寄せていることからもわかる（図20）。なお豪潮は秋圃との再会の翌年天保六年に八十七歳でなくなっている。

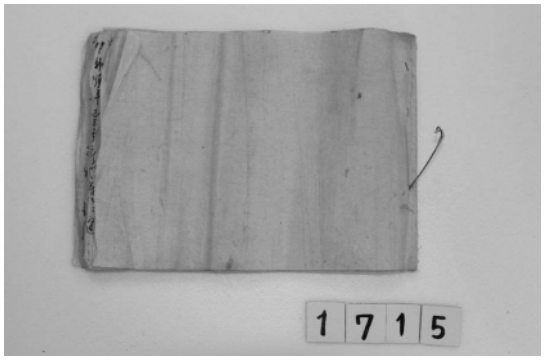
また齋藤家資料中にこの天保五年の年記がある資料三点を見いだすことができる。三点とも山水図の画稿で、《山水図》（〇〇〇七九）には「天保五年夏日寫／齋藤」、《山水図》（〇〇七五一、図21）には「天保五年午夏日／齋藤所蔵／源應擧図」、さらに《山水図（断片）》（〇一二一四）には「天保五年甲午六月大年寫之／藤梅圃寫之書」の墨書がある。夏日、あるいは六月とあるところから、五月、六月の京都滞在中に写したものであろう。

おわりに

以上『京遊日記』（稿）とそれに関する資料をみてきた。最初に記したように許斐友次郎氏は、戦前昭和八年の時点で十四巻からなる『京遊日記』の存在を明らかにしている。許斐氏の言葉から、のちに整理された巻子仕立ての様子もうかがえるが、今回みたような冊子のままのこされていた可能性もある。それにしても「十四巻」というのは、本日記のひと月余の記録からみれば大きすぎるようにも思われる。その十四巻の日記がいかなるものであったか、今となっては想像することが難しい。しかし本翻刻によってその一端は知ることができたと考える。この翻刻が齋藤秋圃、そして近世絵師研究の一助になれば幸いである。

最後に、齋藤家資料を再度借用させていただいた齋藤家、および齋藤仲道氏にあらためて御礼申し上げます。なお資料の解読にあたっては柳川古文書館、太宰府市市史資料室の方々のお力をお借りしました。厚く御礼申し上げます。またこの秋（平成二十四年十月）、第七十八回近世美術研究会において秋圃の年齢に関して報告させていただきました。ご参加いただきご意見を頂戴した方々に感謝致します。

（はしとみ・ひろき　近畿大学教授）



『京遊日記』

図1　表紙

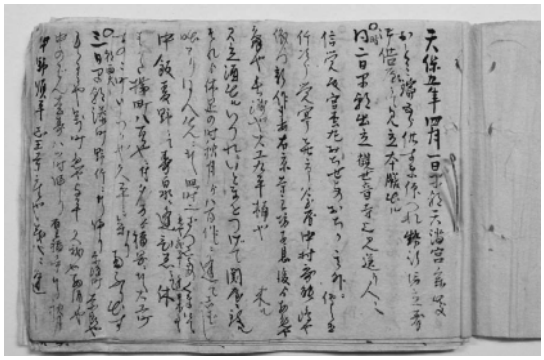


図3　1丁目表

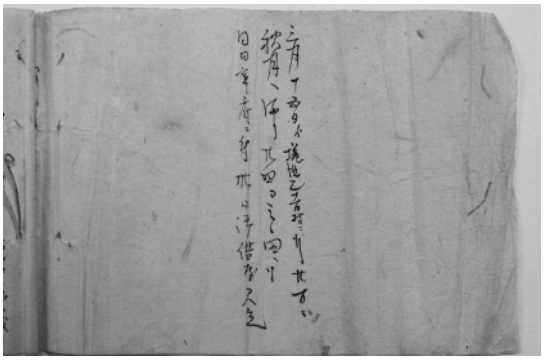


図2　表紙裏

図5　2丁目表

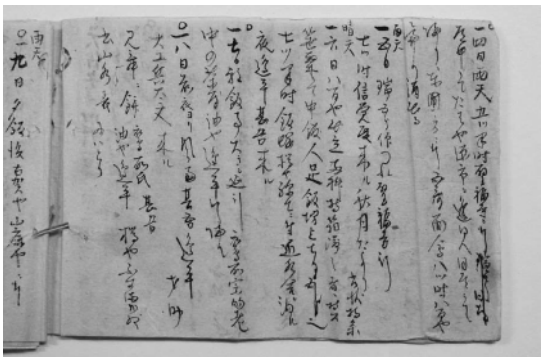


図4　1丁目裏

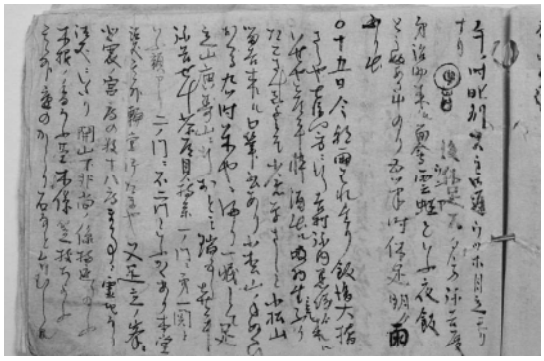


図7　3丁目表

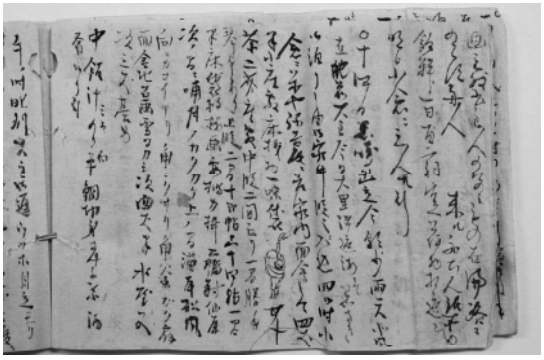


図6　2丁目裏

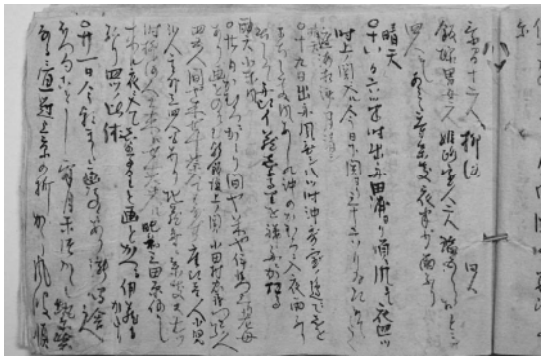


図9　4丁目表

図8　3丁目裏

図11　5丁目表

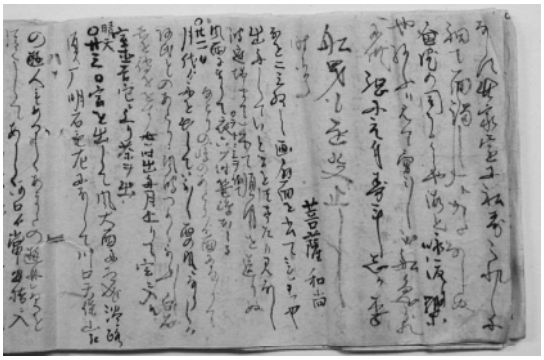


図10　4丁目裏

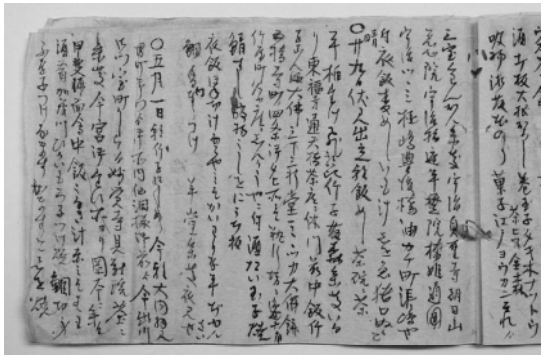


図13　6丁目表

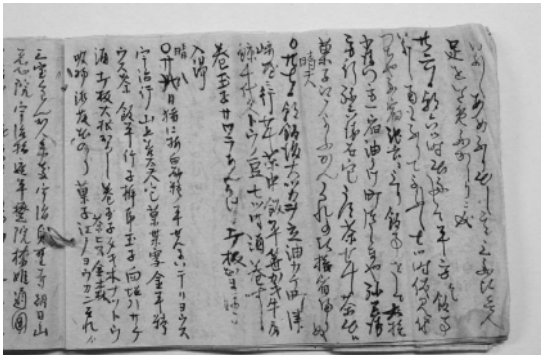


図12　5丁目裏

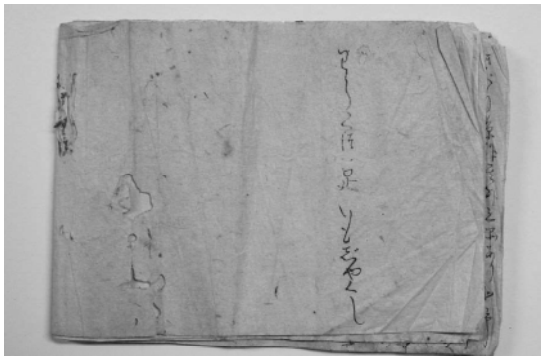


図15　裏表紙

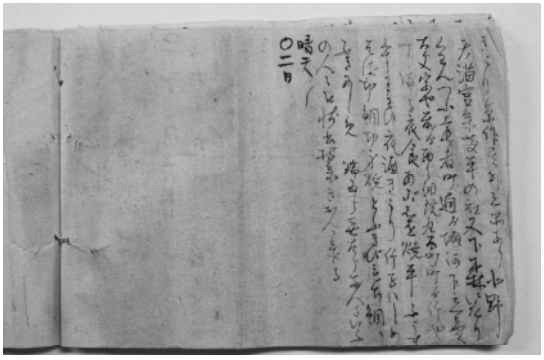


図14　6丁目裏

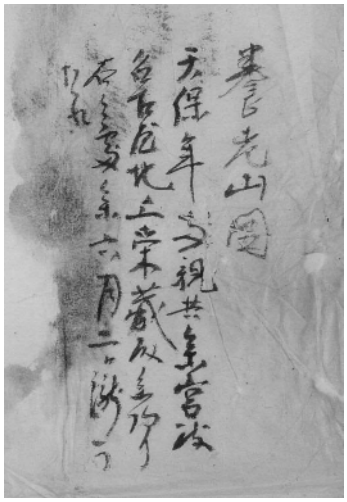


図18　養老瀧図裏面墨書

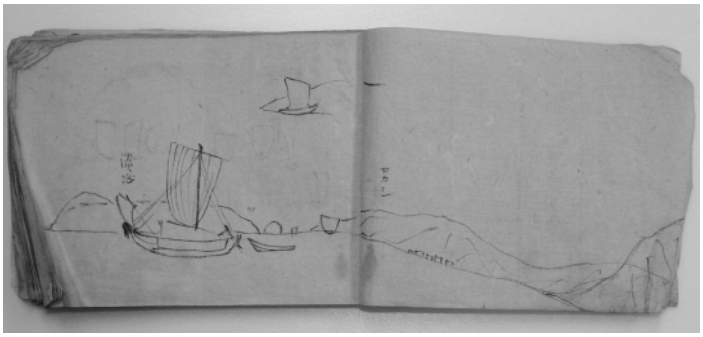


図16　瀬戸内写景図

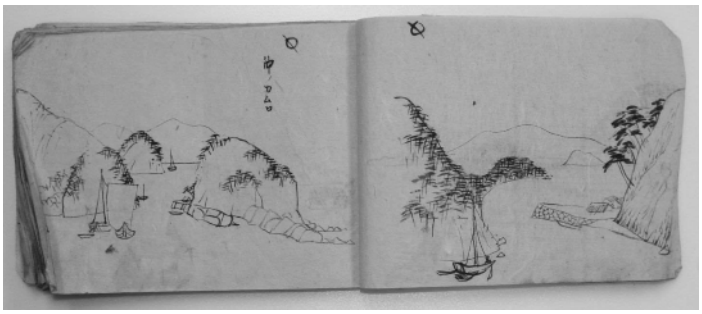


図17　同上

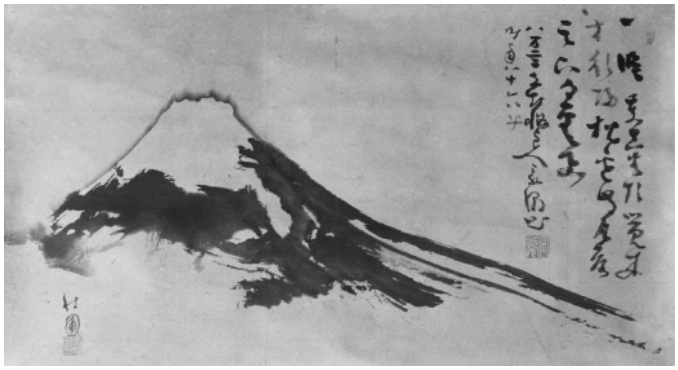


図20　富士図

図21　山水図

図19　天台大師像